

旧約聖書を読んで感じること (122) 健気なエステル

クセルクセス王の大臣ハマンは連日登城するたびに、門にいるモルデカイがひざまずかず、敬礼もしないのが不満でした。ハマンは、モルデカイが自分にひざまずいて敬礼しないのを見て、腹を立てていた。モルデカイがどの民族に属するのかわ知らされたハマンは、モルデカイ一人を討つだけでは不十分だと思い、クセルクセスの国中にいるモルデカイの民、ユダヤ人を皆、滅ぼそうとした。(エス3:6)



王妃エステル Edwin Longsden Long

ハマンは「ユダヤ人が独自の法律をもっていて、王の法律に従わないゆえに、ユダヤ人を根絶する」勅書を出してもらうように、銀貨の提供を約束して求めました。王は大臣に審議してもらうこともせず、ハマンの申し出を許可しました。ハマンは籤(プル)で絶滅する日をアダルの月(約1年後)の13日と決め、勅書が発布されました。

モルデカイは事の一部始終を知り、民全体に降りかかった災難を嘆き、苦しみました。エステルも事情を知り、モルデカイと連絡を取りあいました。モルデカイはエステルに彼女自身が王のもとに行き、自分の民族のために寛大な処置を求め、嘆願するように伝言させ、さらに、「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」(エス4:14)とエステルに頼みます。エステルは苦しみます。寵愛を受けているとはいえ、王に召し出されなければ、謁見を許されない女の立場であり、ユダヤ人の出自をも隠していました。エステルは「すべて

のユダヤ人を集め、私のために三日三晩断食し、飲食を一切断ってください。死ぬ覚悟で王のもとに行きます」と決断を伝えました。続編エステル記にはエステルの祈りが記されています。今あなたは罪を犯したわたしたちを敵の手に渡されました。わたしたちが敵の神々をたたえたからです。…御手をもってわたしたちを救ってください。主よ、あなたのほかにたよるものがないただひとりであるわたしを助けてください。(エス C17) エステルは王宮についても、空虚な神々、肉にすぎない王と呼び、寢床、冠、宴をいかに嫌悪しているかが祈りに込められているのです。

エステルは祈りを終え、晴れ着をまとい、王宮の内庭に立ち、王の召しを誘いました。王は喜び、エステルの望みを叶えようと約束しました。エステルは酒宴を開き、王とハマンを招きました。酒宴の席でエステルは願いを述べました。「私のために私の命と私の民族の命をお助けいただきありがとうございます。私と私の民族は取り引きされ、滅ぼされ、殺され、絶滅させられそうになっているのでございます。私どもが、男も女も、奴隷として売られるだけなら、王を煩わすほどのことではございませんから、私は黙っておきましょう。」クセルクセス王が「誰がそのようなことをたくらんでいるのか」と尋ねると、エステルは「その恐ろしい敵とは、この悪者ハマンでございます」と告げました。王はハマンを怒り、エステルに命乞いをするハマンの姿を見て、王妃に乱暴をするのか、とさらに怒り、ハマンは捕らえられ、即座に処刑されてしまいました。エステルはユダヤ人の出自と、モルデカイとの関係も王に伝えました。モルデカイの善行も報われました。彼らは勅書の取り消しを求めましたが、叶えられず、新たに同月、同日、ユダヤ人が自分の命を守る日として、迫害する者と戦い、奪う日という勅書を出してもらったのです。

その日、ユダヤ人を恐れて、ユダヤ人に立ち向かう者は一人もいなかったとあるのに、ユダヤ人は敵を一人残らず剣にかけて討ち殺した、ただし、物は奪わなかったとあります。絶滅を逃れたユダヤ人にとってエステルの勇気は褒めたたえられるべきですが、古文書とはいえ、報復を正当化する暴力性に、嫌悪を感じます。現在もプリムの祭りとして祝われています。貧しい少女が自分の幸せを捨てて、自分の身内であるイスラエルの民が生き延びるために用いられた姿は、エジプトの奴隷に売られたヨセフの姿と重なり、家族のために身売りした貧しい娘たちをも思い出させられます。